

東北応援ツアー 参加報告書

2011 年経営学部卒業

南部義治

2014 年 10 月 5 日提出

花巻空港に到着した時、私は初めて来る岩手県に心を躍らせておりました。空港に到着してから送迎バスが来るまでの間に空港の外に出てみると、あまりに澄んだ空気に穏やかさすら感じ、ほんとうにここであの恐ろしい天災があったのかと思う程でした。

震災から 3 年以上の月日が流れ、釜石市も大槌町も陸前高田もかつて映像でみていた様な瓦礫の山はなくなっていました。震災前まで家が建っていた場所には今は植物が育ち、正直ガイドさんや交友会の方々に「ここにはかつてたくさんの家があったんだよ」と教えて頂かなければ「広い平野」としか思えない風景が広がっていて、そういった私自身の初見の感覚こそが今回のツアーで都度都度言われていた地震の風化につながっているのだと気付きました。

一方で今回のツアーでは陸前高田の奇跡の一本松や気仙中学校跡、大槌町の旧役所等今では数少ない壮絶な震災の遺構を見る機会も作って下さりました。その過程で移動の車中や釜石市の展望台から仮設住宅が見えた時に私自身一番心に何か感じたものがあり、勉強会で実際に被災された陸前高田市の鈴木さんに仮設住宅での人々の暮らしぶりについて質問をさせて頂いた際に「もともと仮設住宅自体 2 年程度住むものとして作られている。そのため、仮設住宅の土台が腐ってきているものや脆くなってきているものもある」という住まいの現状を教えてください、陸前高田市だけでも 4,400 人以上が今現在も仮設住宅で暮らされている事を知り復興の道のりの長さや厳しさを知りました。最近ではニュースで震災の事を見る機会が以前よりも少なくなり、無知な私の想像を上回る仮設住宅の数にそこに住むそれだけの人々が大切な住まいを失っているという背景とその方々の決して私たちに理解することの出来ない気持ちを考えますと胸に刺さる思いが致しました。

2014 年現在、日本だけをみても「御嶽山の噴火」「広島県の土石流」「大雨洪水による全国的な地盤被害」が夏から秋にかけて起きていたり、「南海トラフ大地震」が近い将来に起こると言われていたり、いつどこで天災に遭遇するか分かりません。そんな時に、岩手の先人の遺訓「津波てんでんこ（自分の命は自分で護れ）」の言葉を思い出し、自分自身にも周りにもその意味を伝承できていればこのツアーに私が参加させて頂いた意義がそこにある気が致します。



最後にこのツアーでは校友会の事務局の皆様や旅行会社の方が組んで下さったプランを通して「岩手県」の自然を視て食べて堪能する事が出来ました。初日に宿泊した三陸花ホテルはまぎくの露天風呂から明け方5時すぎに眺めた朝日に照らされた海は壮大で美しくサーファーを穏やかな波に乗せて運んでいました。